



Title	沿岸スワヒリ語の歴史的展開に関する議論の現在
Author(s)	古本, 真
Citation	スワヒリ＆アフリカ研究. 2024, 35, p. 207-216
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95329
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

沿岸スワヒリ語の歴史的展開に関する議論の現在 Re-thinking the Genesis of Coastal Swahili

古本 真*

FURUMOTO Makoto

0. はじめに

東アフリカの広い地域で話されるスワヒリ語は、均質な存在では決してなく、複数の言語からなる言語群として捉えられるほど多様な変種を内包している。それぞれの変種は、ときに相互理解が困難なほどに異なっており、その歴史的背景もさまざまである。例えば、東アフリカのソマリア南部からモザンビーク北部の沿岸部や、その間の島嶼部、さらにマダガスカル北部には、20 前後のスワヒリ語の方言があるとされているが、これらの直接の祖先にあたる諸変種は、9 世紀にはすでに沿岸の広い地域に分布していたと考えられている (Nurse 1982, 1983, Nurse & Spear 1985, Nurse & Hinnebusch 1993)。

それに対して、内陸部に分布する諸変種の多くは、19 世紀以降の交易ルートの拡大やヨーロッパによる植民地化などに伴い、スワヒリ語が広い地域で用いられるようになった結果生じている。沿岸部のどの変種が内陸部に広がったかについて、断定的に述べることはできない。しかし、ザンジバルが内陸交易の主な出発点となっていたことや、ティップ・ティップをはじめとするザンジバル商人が交易路の拡大に大きな役割を果たしたことを踏まえると、ウングジャ方言が、内陸部諸変種のベースとなったものの一つであることは想像に難くない (宮本 2009, Nassenstein, to appear)。ウングジャ方言は、もともとザンジバルのウングジャ島の都市部で話されていた方言だが、この地域の政治的、経済的發展に伴い、ザンジバルのほかの地域、さらに近隣の沿岸地域でも広く使われるようになっていたことが推測される。そして、20 世紀前半には、ウングジャ方言をもとに標準スワヒリ語が策定されている (Whiteley 1969, 竹村・小森 2009)。

スワヒリ語の諸変種は、歴史的背景にかかわらず、特筆すべき独自の言語特徴を発達させている。しかし、沿岸部の諸方言の多くは、ウングジャ方言や標準スワヒリ語にルーツを見出すことができないという点で、内陸部の諸変種とは大きく異なる¹。以下では、これ

* 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所ジュニア・フェロー (The Research Institute for Languages & Cultures of Asia & Africa, Tokyo University of Foreign Studies)

¹ 歴史的背景の違いから、東アフリカ沿岸部の諸変種は一次方言 (primary dialects)、内陸の諸変種は二次方言 (secondary dialects) と呼ばれることもある (Hill 1973, Nurse 1982)。

までの研究を見直して、東アフリカ沿岸地域におけるスワヒリ語諸方言の歴史的展開に関する議論の現状をまとめる。

1. 東アフリカ沿岸部のスワヒリ語諸方言の系統的位置づけ

スワヒリ語は、ニジェール・コンゴ語族のバントゥ語群に属している。東アフリカ沿岸地域のスワヒリ語諸方言は、近隣のほかのバントゥ系言語とともに、サバキ祖語、さらに北東沿岸バントゥ祖語に遡るとというのが現在の定説である (Nurse & Philippson 1975, Hinnebusch 1981, Nurse & Hinnebusch 1993, Nurse 1999)。この仮説が示唆する通り、スワヒリ語諸方言同士が、バントゥ祖語という共通の祖先をもつと考えられる言語グループのなかで、比較的近い類縁関係にあることは疑いようがない。

一方で、これらのスワヒリ語諸方言同士の親縁関係については、検討の余地がおおいに残されている。確かに、スワヒリ語とラベル付けされた沿岸部の諸変種は、似た言語特徴を有しており、これらがスワヒリ祖語という一つの祖先に遡る関係にあるという前提のもとで議論が展開されることも少なくない (Nurse 1982, Nurse & Spear 1985, Walsh 2018)。しかしながら、さまざまな背景を持つ人たちが「スワヒリ」という集団意識を共有するようになったのは比較的最近であると言われる (日野 1969, Ray 2018)。言語名としての「スワヒリ」というラベルも、東アフリカ沿岸部の類似した言語特徴をもつバントゥ系の諸言語に後天的に付されたものであるとすれば、それらが起源を一にするかは、「スワヒリ語」という言語名によって担保されていないことになる。

系統的近縁性の根拠となるのは改新的特徴である (François 2014, 五十嵐 2021)。言語の通時的分化のプロセスを示す系統樹のなかで、異なる言語や方言が同じ分岐群に位置付けられるかは、共通する改新的特徴の有無によって同定される。沿岸部のスワヒリ語諸変種は、基礎語彙の共有度や同源語の音対応に基づき、北部諸方言と南部諸方言という二つのグループにわけることが提案されている (Nurse 1982, 表 1 参照)。そして、北部諸方言群、南部諸方言群という二つの分岐群を設定することは、それぞれの言語群に特有の改新的特徴の存在からも支持できそうである (Nurse & Hinnebusch 1993: 504-512)。一方、この二つの方言群の間に、共通の改新と認定できる決定的な特徴は、少なくとも現段階ではみつからない (Nurse & Hinnebusch 1993: 501-503)。つまり、スワヒリ語の北部諸方言群と南部諸方言群が、系統的にほかの言語群と区別され、共通のスワヒリ祖語から分岐したという仮説を支える証拠はないのである。スワヒリ語の祖先にあたるバントゥ系言語が一つでなく複数ある可能性は、19 世紀末から 20 世紀前半の研究者たちも指摘しているようだが

(Reusch 1953, 宮本 2009)、比較言語学の方法による分析でも、その可能性を棄却することとはできない。

表 1：沿岸部のスワヒリ語諸変種一覧 (Furumoto, Nassenstein & Shinagawa, to appear)

北部諸方言	ムイニ (Mwiini) バジュニ (Tikuu/Bajuni) ラム諸方言 (Siu, Pate, Amu)
南部諸方言	ヴンバ (Vumba) ムタガタ (Mtang'ata/Mrima) ペンバ (Pemba) トゥンバトゥ (Tumbatu) マクンドウチ／カエ／ハディム (Makunduchi/Kae/Hadimu) マフィア (Mafia/Ngome)
混淆型	モンバサ諸方言 (Mvita, Ngare, Jomvu, Kilifi, Kilindini) チフンディ (Chifundi) ウングジャ (Unguja)

2. スワヒリ語南部諸方言とコモロ諸語の系統関係

例えば、南部諸方言には、母音複写と呼ばれる動詞の活用がある。(1a) に示す通り、スワヒリ語の動詞活用形は、TAM (テンス・アスペクト・ムード) 接頭辞を伴う場合、語幹末には *-a* という母音が現れる。一方、(1b, c) にあげた母音複写を伴う活用形は、例文中の $\emptyset$ が示す通り TAM 接頭辞を欠き、語幹末には語幹の次末音節と同じ母音 ((1b, c) では *-o*) が現れる²。

(1) スワヒリ語トゥンバトゥ方言 (竹村 2012: 217, 218, 219)

a. *ni-ma-som-a* *kiswahili*

SM1SG-PRF-study-FV Swahili

「私は (すでに) スワヒリ語を学んでいる。」

² 例文 (1) の表記法やグロスの一部は、出典元で提示されているものと異なる。この例文に付した略号は、以下の通りである。1: 1 人称、FV: 末母音、HAB: 習慣、NEG: 否定、PFV: 完結、PRF: 完了、SG: 単数、SM: 主語標識

b. *ni-Ø-som-o* *kiswahili*

SM1SG-PFV-study-FV Swahili

「私はスワヒリ語を学んだ。」

c. *si-Ø-som-o* *kiswahili*

NEG.SM1SG-HAB-study-FV Swahili

「私はスワヒリ語を学ばない。」

母音複写という形態法は、スワヒリ語の北部諸方言では使われないが、スワヒリ語の分布域から地理的に隔絶した地域で話されるバントゥ系言語でも使われており (Grégoire 1979, Nurse 2008)、スワヒリ語南部諸方言だけにみられる特徴というわけではない。また、(1b) のように、母音複写により完了や過去といった先行する事態が表されるというのも、ほかのバントゥ系言語と共通している。仮に、バントゥ諸語が共通の祖先から段階的に派生していく過程で、母音複写の形式的、機能的特徴が生じたと想定するならば、そのバントゥ系言語における分布を踏まえると、これらの特徴はスワヒリ語諸変種がほかのバントゥ系言語と分化する前に生じた可能性が考えられる。こうした古い時代に遡る可能性がある特徴は、スワヒリ語の方言群の分岐のような、よりあとの時代の言語の枝分かれを探るための手がかりとはならない。

一方、(1c) のように、否定形に活用した母音複写形が習慣相を表すのに用いられるというのは、南部諸方言で共通してみられるが (Whiteley 1956, Lambert 1957, Kipacha 2004, 竹村 2012)³、ほかのバントゥ系言語ではほとんどみられない。また、似た言語特徴が別々の言語で並行して発達することもあるが、この否定形における母音複写の用法については、個別の言語変種で偶然、独立的に生じたとも考えにくい。こうした分布の偏りや変化の特殊性を考慮すると、この特徴を共有する諸変種は同一の分岐群をなしており、個別の諸変種が派生する前にこの特徴が発達したと考えられる。南部諸方言の系統的一体性は、こうした分析によって裏付けられるのである。

南部諸方言に特有の改新として、母音複写以外の特徴も提示されているが (Nurse & Hinnebusch 1993: 511-512)、特筆すべきことに、これらの特徴は、総じてスワヒリ語南部諸方言だけでなく、コモロ諸語にもみられる。コモロ諸語は、スワヒリ語と同じサバキ系の

³ スワヒリ語マクンドゥチ方言では、ほかの方言と異なり、否定形に活用した母音複写形が、習慣相ではなく、未来にある出来事が起こらないことを表す (Racine-Issa 2002)。この用法は、比較的最近の言語変化の結果生じた可能性がある (Furumoto & Gibson 2022)。

言語だが、スワヒリ語とは別の言語群と考えられている⁴。音対応をみると、この分類は妥当のようにみえるが、改新的特徴を共有しているという点を重視すれば、スワヒリ語の南部諸方言とコモロ諸語が、北部諸方言群と独立した一つの系統群をなしている可能性も考えられる。

3. スワヒリ語の諸方言同士の接触について

「沿岸部スワヒリ世界」という言葉が象徴する通り、古くから、東アフリカ沿岸地域では、交易などを通じた人の交流があった（福田 1997, 鈴木 2022）。こうした背景から、スワヒリ語諸方言の一体性を示唆する表面的な言語特徴の類似は、系統的近さより、断続的な方言同士の接触によるところが大きい可能性が指摘されている（Güldemann 2018: 478-479）。

例えば、標準スワヒリ語のベースとなったウングジャ方言は、南部諸方言の地域で話されており、音韻特徴から南部諸方言に分類することができるが、文法や語彙からは、むしろ北部諸方言のようにみえる（Nurse 1982, 1984, 1988）。こうしたウングジャ方言の混淆的姿は、18 世紀頃のラム群島からの人の移住によって生じた可能性がある（Nurse & Hinnebusch 1993: 563-566, Sheriff 2018: 530）。

後天的な言語接触の影響により、スワヒリ語諸方言やサバキ諸語の系統分類が、はっきりとしなくなっているケースはほかにもある（Möhlig 1984/5, Schadeberg 1994, Schadeberg & Mucanheia 2000, Devos 2008, Walsh 2018）。スワヒリ語南部諸方言とコモロ諸語も、一見すると大きく異なり、同じ分岐群にあるとは考えづらいが、その違いは、南部諸方言が、コモロ諸語と分化したあとで、北部諸方言からの影響を被ったことによって生じているかもしれない。例えば、南部諸方言の一つであるマクンドウチ方言の完了接頭辞 *me-* は、北部諸方言からウングジャ方言経由で借用された可能性が指摘されている（Güldemann 2003: 187）。このほかにも、動詞の否定形に現れる完了接頭辞 *ja-* や、関係節標識 *amba-* など、北部諸方言で発達したのちに、南部諸方言に伝播した可能性がある（Nurse & Hinnebusch 1993: 405-406, 422, 555）。こうした形態統語特徴の拡散を踏まえると、南部諸方言のほかの特徴のなかにも、北部諸方言との接触によって生じたものが少なからずあることが推測される。

⁴ スワヒリ語諸方言の分類は、研究者間で異なる（Sacleux 1909, Stigand 1915, Guthrie 1967-71, Whiteley 1969, Nurse 1982, 湯川 1989, Möhlig 1995, 宮本 2009, Walsh 2018）。分類によっては、コモロ諸語が「スワヒリ」とラベル付けされたグループのなかに含まれることもある。

4. おわりに

スワヒリ語の南部諸方言とコモロ諸語を、サバキ諸語のなかで別の系統に位置付け、二つのグループの間にみられる形質的類似を、古形の残存、ないしは後天的な言語接触の痕跡と考える分析は排除されたわけではない (Nurse 1989)。しかし、南部諸方言の一体性を示唆する改新的特徴がコモロ諸語にもみられることを考慮すると、系統的には南部諸方言とコモロ諸語が近い関係にある可能性も考えられる。そして、東アフリカ沿岸部のスワヒリ語諸変種を一つの系統としてまとめるに足る十分な証拠が未だ提示されていないことを踏まえると、スワヒリ語の北部諸方言群と南部諸方言群が、サバキ諸語のなかで最も近い系統関係にはない可能性や、南部諸方言が、コモロ諸語から分化したあとで、北部諸方言からの影響を受けて、スワヒリ語らしい特徴を獲得した可能性も残る。

バントゥ系の言語は、現在のカメルーン西部のサナガ川流域を祖地として、約 5000 年前から徐々にサブサハラ・アフリカの広大な地域に、分布域を拡大していったと言われている (米田 2022)。この拡散の過程に関しては諸説あるものの、東部バントゥ諸語に分類される諸言語の祖先が東アフリカに到達したのちに、現在のスワヒリ語諸方言へとつながる分派が生じたと考えることに大きな異論はないだろう。しかし、仮に、スワヒリ祖語が再構できないとすると、スワヒリ語北部諸方言の祖先と、南部諸方言の祖先は、東部バントゥ諸語に含まれるほかのサバキ系言語や北東沿岸バントゥ系言語から、別々に枝分かれしたということになる。そして、このシナリオは、北部諸方言群と南部諸方言群が、異なる経路を辿って東アフリカ沿岸部に到達したことを示唆する。北部諸方言と南部諸方言の祖地が、それぞれ、現在のケニアのラム諸島のあたり、タンザニアのキルワ島周辺であるという見立てが正しければ (Nurse 2019)、それぞれの言語を話す集団は、この二つの地域に到達したのちに合流して、その結果、スワヒリ語という一体性ができあがったということになる。

スワヒリ語は、シュングワヤ地域 (ケニアのタナ川とソマリアのジュバ川に挟まれた地域) を祖地として、そこから東アフリカ沿岸地域に広がっていく過程で、徐々に異なる特徴を獲得していったと言われてきた (Nurse & Spear 1985, 竹村・小森 2009)。それに対し、Nurse (2019) は、スワヒリ祖語が再構できるという立場を堅持しながらも、北方のクシ系の言語に由来するとみられる特徴が北部諸方言群のみにみられることを根拠に、スワヒリ祖語にあたる言語が話されていた地域が、より南方に位置していたという説を提示している。そして、本稿では、これまでのスワヒリ語の歴史言語学的研究を見直しながら、スワヒリ祖語が再構できることを自明視するスワヒリ語単起源説にまで疑問を呈した。

19 世紀以降に生じた内陸部へのスワヒリ語の分布域の拡大については、ある程度歴史資料から探することもできるが (Nassenstein, to appear)、それ以前の伝播や分岐のプロセスの解明の大部分は、比較的最近の資料から読み取れる言語特徴の分析や、現在話されている言語の記述に依拠することになる。そのため、東アフリカ沿岸部におけるスワヒリ語の歴史的展開に関する理解を更新するためには、この地域のスワヒリ語諸方言の記述研究を推し進めていくことが必要不可欠となる。

謝辞

本研究はアジア・アフリカ言語文化研究所の共同利用・共同研究課題「多言語混在状況を前提としたアフリカ記述言語学研究の新展開 (jrp000268)」及び、JSPS 科研費 23H00622 の成果の一部である。執筆に際して、有益な助言を与えてくれた品川大輔氏には、記して謝意を表したい。

参考文献

- Devos, Maud. 2008. *A Grammar of Makwe: Palma, Mozambique*. München: Lincom Europa.
- François, Alexandre. 2014. “Trees, Waves & Linkages: Models of Language Diversification.” In Claire Bowerman & Bethwyn Evans (eds.), *The Routledge Handbook of Historical Linguistics* (pp. 161-189). London & New York: Routledge.
- Furumoto, Makoto, & Hannah Gibson. 2022. “Variation in Kimakunduchi & Standard Swahili: Insights from verbal morphosyntax.” *Linguistique et Langues Africaines*, 8(1), online.
- Furumoto, Makoto, Nico Nassenstein, & Daisuke Shinagawa, to appear. “Swahili” In Walter Bisang, Johannes Kabatek, & Bernd Kortmann. *Spread of World Languages*. Berlin: De Gruyter Mouton.
- Grégoire, Claire. 1979. “Les voyelles finales alternantes dans la conjugaison affirmative des langues bantoues centrales.” *Journal of African Languages & Linguistics*, 1/2, 141-172.
- Güldemann, Tom. 2003. “Grammaticalization.” In Gérard Philippson & Derek Nurse (eds.), *The Bantu Languages* (pp. 182-194). London & New York: Routledge.
- Güldemann, Tom. 2018. “Areal Linguistics beyond Contact & Linguistic Areas of Afrabia. In Tom Güldemann (ed.), *The Languages & Linguistics of Africa* (pp. 448-545). Berlin: De Gruyter Mouton.

- Guthrie, Malcolm. 1967-1971. *Comparative Bantu: An Introduction to the Comparative Linguistics & Prehistory of the Bantu Languages* (4 vols.). Farnborough: Gregg Press.
- Hill, Trevor. 1973. "The Primary Dialects of Swahili: An Approach to a Linguistic-Geographical Survey." *Kiswahili*, 43(2), 7-18.
- Hinnebusch, Thomas J. 1981. "Northeast Coastal Bantu." In *Studies in the Classification of Eastern Bantu Languages* (pp. 21-125). Hamburg: Buske.
- Kipacha, Ahmadi. 2004. *A Descriptive & Historical Account of the Kingome Dialect of Swahili* (PhD Thesis). SOAS.
- Lambert, H. E. 1957. *Ki-Vumba: A Dialect of the Southern Kenya Coast*. Kampala: East African Swahili Committee.
- Möhlig, Wilhelm J. G. 1984/5. "The Swahili Dialects of Kenya in Relation to Mijikenda & to the Bantu Idioms of the Tana Valley." *Sprache Und Geschichte in Afrika*, 6, 253-308.
- Möhlig, Wilhelm J. G. 1995. "Swahili Dialekte." In Wilhelm J. G. Möhlig & Gudrun Mische (eds.), *Swahili Handbuch*, (pp. 41-62). Cologne: Rüdiger Köppe.
- Nassenstein, Nico. to appear. *Western Swahili Dialects: A Grammatical Survey of Major Varieties*. Leiden: Brill.
- Nurse, Derek. 1982. "A Tentative Classification of the Primary Dialects of Swahili." *Sprache Und Geschichte in Afrika*, 4, 165-206.
- Nurse, Derek. 1983. "A Linguistic Reconsideration of Swahili Origins." *AZANIA: Journal of the British Institute in Eastern Africa*, 18(1), 127-150.
- Nurse, Derek. 1984. "A Historical View of the Southern Dialects of Swahili." *Sprache Und Geschichte in Afrika*, 6, 225-251.
- Nurse, Derek. 1988. "The Borrowing of Inflectional Morphology: Tense & Aspect in Unguja." *Afrikanistische Arbeitspapiere*, 15, 107-119.
- Nurse, Derek. 1989. "Is Comorian Swahili? Being an Examination of the Diachronic Relationship between Comorian & Coastal Swahili." In Marie-Françoise Rombi (ed.), *Le swahili et ses limites: Ambiguïté des notions reçues* (pp. 83-105). Paris: Éditions Recherche sur les Civilisations.
- Nurse, Derek. 1999. "Towards a Historical Classification of East African Bantu Languages." In Jean-Marie Hombert & Larry M. Hyman (eds.), *Bantu Historical Linguistics* (pp. 1-41). Stanford: CSLI.

- Nurse, Derek. 2008. *Tense & Aspect in Bantu*. Oxford: Oxford University Press.
- Nurse, Derek. 2019. "When Northern Swahili Met Southern Somali." In Emily Clem, Peter Jenks, & Hannah Sande (eds.), *Theory & Description in African Linguistics: Selected Papers from the 47th Annual Conference on African Linguistics* (pp. 649-665). Berlin: Language Science Press.
- Nurse, Derek, & Thomas J. Hinnebusch. 1993. *Swahili & Sabaki: A Linguistic History*. Berkeley: University of California Press.
- Nurse, Derek, & Gérard Philippson. 1975. "The North-Eastern Bantu Languages of Tanzania & Kenya: A Tentative Classification." *Kiswahili*, 45(2), 1-28.
- Nurse, Derek, & Thomas Spear. 1985. *The Swahili: Reconstructing the History & Language of an African Society, 800-1500*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Racine-Issa, Odile. 2002. *Description du kikae: Parler swahili du sud de zanzibar: Suivie de cinq contes*. Leuven: Peeters.
- Ray, Daren. 2018. "Defining the Swahili." In Stephanie Wynne-Jones & Adria LaViolette (eds.), *The Swahili World* (pp. 67-80). London & New York: Routledge.
- Reusch, R. 1953. "How the Swahili People and Language came into Existence." *Tanganyika Notes and Records*, 34, 20-27.
- Sacleux, Charles de. 1909. *Grammaire des dialectes swahilis*. Paris: Procure des Pères du Saint-Esprit.
- Schadeberg, Thilo C. 1994. "KiMwani at the Southern Fringe of KiSwahili." In Peter Bakker & Maarten Mous (eds.), *Mixed Languages: 15 Case Studies in Language Intertwining* (pp. 239-244). Amsterdam: IFOTT.
- Schadeberg, Thilo C., & Francisco Ussene Mucanheia. 2000. *Ekoti: The Maka or Swahili Language of Angoche*. Köln: Rüdiger Köppe.
- Sheriff, Abdul. 2018. "Zanzibar Old Town." In Wynne-Jones & Adria LaViolette (eds.), *The Swahili World* (pp. 529-540). London & New York: Routledge.
- Stigand, Chauncey Hugh. 1915. *A Grammar of Dialectic Changes in the Kiswahili Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Walsh, Martin. 2018. "The Swahili Language & Its Early History." In Stephanie Wynne-Jones & Adria LaViolette (eds.), *The Swahili World* (pp. 121-130). London & New York: Routledge.
- Whiteley, Wilfred H. 1956. *Ki-mtang'ata: A Dialect of the Mrima Coast, Tanganyika*. Kampala: East Africa Swahili Committee.
- Whiteley, Wilfred H. 1969. *Swahili: The Rise of a National Language*. London: Methuen.

- 五十嵐陽介. 2021. 「分岐学的手法に基づいた日琉諸語の系統分類の試み」 林由華・衣畑智秀・木部暢子（編）『フィールドと文献からみる日琉諸語の系統と歴史』 pp. 17-51. 開拓社.
- 鈴木英明. 2022. 「沿岸部スワヒリ世界の形成と展開」 荒川正晴・永原陽子・大黒俊二・小川幸司・木畑洋一・富谷至・中野聡・林佳世子・弘末雅士・安村直己・吉沢誠一郎（編）『アフリカ諸地域：～二〇世紀』（岩波講座世界歴史, 第 18 巻） pp. 131-154. 岩波書店.
- 竹村景子. 2012. 「スワヒリ語トゥンバトゥ方言（G43）」 塩田勝彦（編）『アフリカ諸語文法要覧』 pp. 211-226. 溪水社.
- 竹村景子・小森淳子. 2009. 「スワヒリ語の発展と民族語・英語との相克：タンザニアの言語政策と言語状況」 梶茂樹・砂野幸稔（編）『アフリカのことばと社会：多言語状況を生きるということ』 pp. 385-418. 三元社.
- 日野舜也. 1969. 「東アフリカにおけるスワヒリについて」『アジア経済』 2, 4-28.
- 福田安志. 1997. 「インド洋交渉史」 宮本正興・松田素二（編）『新書アフリカ史』 pp. 210-248. 講談社.
- 宮本正興. 2009. 『スワヒリ文学の風土：東アフリカ海岸地方の言語文化誌』 第三書館.
- 湯川恭敏. 1989. 「スワヒリ語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）『言語学大辞典』 第 2 巻 pp. 381-384. 三省堂.
- 米田信子. 2022. 「歴史言語学からみるバントゥ系民族の移動」 荒川正晴・永原陽子・大黒俊二・小川幸司・木畑洋一・富谷至・中野聡・林佳世子・弘末雅士・安村直己・吉沢誠一郎（編）『アフリカ諸地域：～二〇世紀』（岩波講座世界歴史, 第 18 巻） pp. 201-220. 岩波書店.